



白衣から着物に着替えれば、歯科医師から噺家に——。診療所で「患者」ならぬ「観客」に歯の健康を軽妙に語りかけるのは、池田市の小石剛先生(34)だ。医院で開く落語と健康講話の「手水寄席」(ちょうずよせ)が、地域で評判を集めている。寄席を開いて4年目を迎えた小石先生に話を聞いた。

池田市・こいし歯科 小石 剛先生



落語でつなぐ地域の和

こいし・ごう 1978年、池田市生まれ。岡山大学大学院卒業。歯学博士・日本抗加齢医学会専門医。好きな言葉は「歩歩是道場」。趣味は音楽や野外活動など。

共生を実感

寄席を開くなかで、地域のつながりを強く意識するようになった。寄席の準備や片付けには、スタッフや落語研究会のメンバーが協力している。小石先生の

「観客も手伝ってくれるという。地域に生かされていくことを実感しました。地域のなかで生かされ、生きる。『共生』の大切さを身に染みて感じています」。小石先生の

取り組みは寄席だけに留まらず、池田駅前のゴミ拾いイベントや、助産師・保健師らとの子育て講座など、「交流や出会い」をテーマに地域に貢献している。

「手水寄席」がきっかけで、自らも落語の魅力に取りつかれた。2012年4月からは、天神橋の寄席「繁盛亭」の落語家入門講座で週2回、

「修行」に励んだ。9月には、繁盛亭で落語ができる6人に選ばれ、「天神亭笑歯」(てんじんてい・わっは)の芸名をもらい、観客を前に演じたが、医院ではまだ一度も高座に上っていない。今年の目標は、「手水寄席で落語をすること」だ。ひそかに歯科にまつわる創作落語を練っているとか。

豊富な声と仕草に診療所が笑いに包まれた。

院内に足を踏み入れると、20ほどある観客席には高齢者だけでなく、夫婦連れや親子が詰めかけ、開演を待っていた。正面に構える手作りの舞台、天井から吊り下げられたちょうちん、出演者の名前を書いた札……。待合室が立派な寄席小屋の様変わりしている。

2カ月に1回開く「手水寄席」では、大学の落語研究会やアマチュア落語家の一席の後、小石先生がお口の健康について話す。この日は、社会人落語の名手が演じ、表現

「話の切り口が病気の」とばかりで固くなってしまった」と話すように、参加者は毎回4〜5人ぐらいいなかつたという。

「恋家歯つ恋」(こいしや・はつこい)と、小石先生の健康講話は毎回、オリジナルの新作だ。この日のテーマは、「やってみよう健口対策」。「イチローは一日何回歯磨きをする?」「歯垢0.1%には細菌は何匹?」など、身近なテーマで観客を引き付け、歯の磨き方を実習。歯と全身の健康とのかかわりを柔らかな語り口で楽しく伝えていく。

敷居を低く

小石先生が待合室で健康講話を始めたのは8年前。父親から医院を継承した際、「歯医者さんの敷居を低くし、予防歯科の重要性を伝えたい」との思いで「歯の健康の会

好評です 院内寄席



待合室での手水寄席。落語(上)と小石先生による健康講話(左)。毎回、満席で立ち見が出るほどの盛況ぶり、参加者は患者さんと地域の人と「半々ぐらい」

連携めざし

今後は、地域のつながりを生かし、歯科医院にかかると「親や子どもに予防歯科の様ざまな情報を伝えられるような診療所づくり」をめざす。そして、「地域の歯科医院と共同して治療に取り組むことができた」と考えている。

「例えば、CTを導入している先生にインプラント患者を気軽に紹介するなど、もっと周りの先生と連携していきたい。それぞれ歯科治療の得意分野がある。『勝ち組』とか『負け組』という言葉はおかしい。地域で患者さんの健康を守るために、患者さんにとって一番良い治療をすることが重要なと感じています」

池田市「おたなKAWA」落語商店街

2007年に市立上方落語資料展示館「落語みゅーじあむ」がオープンしたことをきっかけに、周辺の商店街のメンバーらが落語をキーワードに取り組んでいる地域振興企画。各店が落語にちなんだ目玉商品やイベントを考案する。「一店一席」運動などを展開している。「おたなKAWA」は「お店界限」のこと。落語を含む「歩いて歴史と文化を感じるまちづくり」が評価され、まちづくり交付金情報交流協議会の「第4回まち交大賞全国大会」でアイデア賞を受賞。